

主からの啓示

「私は天からの幻に背くことはしませんでした。」

使徒言行録 26:19

聖書が編纂されていた当時、神の民に対する神の指示や警告の多く、また神の計画や御旨の啓示の多くは、「幻」という手段によって伝えられました。これらの幻は、常にとはいえないまでも頻繁に奇跡的な性質を帯びており、それを受けた者たちの心に、与えられた情報が主からのものであることに疑いの余地を残さないほど、強烈な印象を与えるものでした。

これらの幻は、単なる好奇心を満たすために与えられたのではなく、それを受けた者たちが、自分自身のため、あるいは他者のため、あるいはその両方のために、主の計画が実現される過程において、主と協力できるよう備えられるためであった。多くの場合、聖書では幻は、民に語りかける主の「声」として言及されている。聖書をざっと目を通すだけでも、神がその御声への従順をいかに重要視しておられるか、また不従順がもたらす悲惨な結果がどれほど深刻であるかが十分に理解できるでしょう。

旧約聖書の幻

神はノアに、単に迫り来る大洪水について知らせるためだけでなく、彼自身と家族を救うための準備をさせるために語られた。（創世記 6:13-18；ヘブライ人への手紙 11:7）また、神はウルにいたアブラハム（ ）にも語りかけ、地のすべての氏族を祝福するというご自身の御心を告げ、自分の民を離れて、神が示す地へ行くよう指示を与えられた。主とのこの交わりから得られる祝福は、アブラハムがこれらの指示に従うかどうかにかかっていた。創世記12:1-3

神は燃える荊棘の中でモーセに御自身を現し、彼を御自分の民の偉大な救い主として任命されました。モーセに幻が与えられたその時、彼が立っていた地面さえも聖なるもの、すなわち聖別されたものとなりました。それは、神がその場所を用いて、御自分のしもべに、彼に何をしてほしいかを伝えられていたからです。（出エジプト記 3:1-10）もしモーセがそれ以降も主の絶え間ない恵みを享受しようとするなら、その幻に従う以外に選択肢はありませんでした。

預言者イザヤは、「高く、高く上げられた」主を見る幻を与えられました。（イザヤ書 6:1,8）この幻の中で、イザヤは主が「誰を遣わそうか。誰が我々のために行くか」と問う声を聞きました。預言者の答えは、「ここにいます。私を遣わしてください」というものでした。この指示こそが、主が古代に御民に与えられた幻の大部分の意味でしたが、必ずしもこれほど明確に述べられていたわけではありません。

新約聖書の幻

新約聖書で言及されている最も注目すべき幻は、イエスの洗礼の際、ヨハネによる福音書で与えられたものでした。ヨハネは、神の御霊がイエスに降りるのを目撃し、「天からの声が、『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者である』と言った」のを聞きました。（マタイによる福音書3:16,17；ヨハネによる福音書1:31-34）ここで、三十歳になったイエスは、地上の宣教活動を始めようとしていた。イエスは、天の父である——すなわち、「書の巻」、すなわち旧約聖書に記されていたすべてのことを成し遂げるために来られたのである。（詩編40:6-8；ヘブライ人への手紙10:5-9）主を導くために旧約聖書に記されたすべての指示は、聖霊の直接の靈感の下で記録されたものでした。その意味を解釈できる者は誰もいませんでした。イエスの完全な知性でさえ、その重要性を理解するためには、特別な啓示——すなわち幻——が与えられる必要があります、天がイエスに開かれたとき、彼はまさにこの祝福を受けたのです。

イエスは、ご自身について記されていたことを成し遂げるために来られた。その意味が明らかにされると、イエスはためらうことなく、それらを成し遂げるという任務に着手された。イエスが天からの啓示に従うために、どれほど大きな代償を払われたことか！ イエスの宣教の期間は短く、毎日が疲れ果てるような日々であった。彼は敵から罵られ、友人からは誤解され、そして「罪人たちによる激しい反対」は、ついに彼の逮捕、裁判、そ

して残酷な十字架刑へとつながった。（ヘブライ人への手紙 12:3）これこそが、その幻の意味であった。イエスは「屠られる小羊のように」導かれることになっていた。（イザヤ書 53:7）彼は「世のいのちのために」自らの肉を捧げるべきであった。（ヨハネによる福音書1:29；6:51）彼は「悲しみの男、苦しみを知る者」となるはずでした。

（イザヤ書53:3）彼は、これらすべての困難な経験において、天の父に従順でした。彼は、激しい苦しみという試練を経験しているときでさえ、従順であるとはどういうことかを学びました。ヘブライ人への手紙2:10；5:8

従順の代償を相殺するかのように、主はご自身の命を捧げている最中であっても、豊かな報いを受けられました。主が体験された平安と喜びは、主が払った犠牲を十二分に補って余りあるものでした。（ヨハネによる福音書14:27）実際、これが、主が「目の前に置かれた喜び」のために従い、「恥をものともせず、十字架に耐え抜く」ことを可能にしたのです。（ヘブル人への手紙 12:2）確かに、それは未来の喜びでした。しかし、その喜びへの期待と、約束された報いを受け取るという完全な確信が、イエスに、この世が与えることも奪うこともできない現在の平安と喜びをもたらしたのです。こうして、イエスは「悲しみの人」でありながらも、疑いなく天の父と和解していたのです。「主の喜び」が、イエスの力でした。ネヘミヤ記 8:10

パウロの幻

タルソスのサウロは、当初、主が自分に何を望んでおられるかについて誤解していたものの、常に熱心な神の僕であった。彼が、冒頭の聖句で言及されている啓示的な幻を授かったのは、誤った方向への奉仕の任務の最中であり、後に彼は、その幻に関して「不従順ではなかった」と証言している。この幻こそが、サウロを誤った道から立ち止まらせたのである。それは、キリストと共に苦難を分かち合う者として彼が占めるべき立場と、異邦人の使徒として果たすべき使命を彼に明らかにしたのである。使徒言行録9:1-16

キリストのためのパウロの地上の奉仕に関して言えば、それがパウロにとって持つ深い意味を最も簡潔に要約しているのは、主が幻の中でアナニアに、サウロに「御名のゆえに、どれほど大きな苦難に遭うことになるか」を告げるよう命じた時の言葉であろう。（使徒言行録9:16）天からの幻への従順は、パウロにとって確かに多くの苦難を意味した。（コリントの信徒への手紙二 11:23-28; 12:7-10）しかし、パウロはこれを喜びとした。なぜなら、その幻は、偉大なメシアの大義において、主と共に苦しむ特権が彼に与えられていることを明らかにしていたからである。（コロサイの信徒への手紙 1:24）

これらの苦しみは、幻への従順——すなわち、主が彼に奇跡的に啓示されたことを他の人々に知らせるといふ従順——によってもたらされたものでした。アグリッパ王に対し、自分がその幻に背いたことはないと宣言した後、パウロはこう付け加

えた。「私はまずダマスコの人々に、次にエルサレムで、そしてユダヤ全土で、さらに異邦人に対しても、すべての人が自分の罪を悔い改め、神に立ち返り、善行によって自分が変わったことを証明しなければならないと宣べ伝えたのです。」（使徒言行録 26:20）パウロは王に、「こうした理由」によって、同胞のユダヤ人たちから告発されたのだと説明した。（使徒言行録 26:21）その結果、彼はユダヤ人と異邦人の双方から迫害を受け続け、ついにはこの世での歩みを終えるに至った。テモテへの手紙第二 4:7,8 ; 使徒言行録 20:17-25

パウロは主を絶対的に信頼し、自分の最高の霊的益にならないことは何一つ自分の人生に許されないことを知っていたため、心と魂の平安を享受していた。しかし、天からの幻に従って命を捧げなければならないという切迫した使命感からは、決して安らぎを得ることはなかった。ユダヤ人の会堂であれ、異教の神殿であれ、船上であれ、あるいは牢獄であれ、彼の人生を燃え立たせた唯一の情熱は、その天の幻の意味を他の人々に伝えることでした。彼に啓示された真理は、イエスがキリストであり、教会と世界の希望が、贖い主であるイエスに集まっているということでした。その啓示はさらに、キリストこそが、すべての敵、すなわち大敵である死さえもその足の下に置かれるまで、統治し続ける方であることを明らかにしました。テモテへの手紙第一 2:5-7 ; コリントの信徒への手紙第一 1:23 ; 15:25,26

パウロの忠実さは、キリストの福音を証しすることにとどまりませんでした。彼は兄弟たちへの奉

仕に熱心であり（ ）、彼らに「神の御計画のすべて」を宣言することをためらいませんでした。（使徒言行録 20:27）彼は信仰の忠実な擁護者であり、教会内の肉的な精神に対しては率直に反対の声を上げた。彼は、キリストこそが教会の真の頭であることを強調し、兄弟たちが「私はパウロ派だ」とか「私はアポロ派だ」と言うことは不適切であると説いた。1コリント 3:4

時代の終わり

パウロ、ペテロ、ヨハネによる福音書はすべて、現在の時代の終わりに、主の民が神の計画と御旨に対する理解を深めるという祝福を受けると私たちに保証しています。主ご自身の証言も同様の趣旨です。イエスは、ご自身の再臨と「第二の臨在」の様相について説明する際、次のように言われました。「稲妻（ギリシャ語：明るく輝くもの）が東から現れて西まで輝くように、人の子の到来（ギリシャ語：臨在）もそうなるであろう。」（マタイによる福音書24:27）イエスが、ご自身の臨在の日に真理の光が徐々に夜明けを迎える様子を例えるために用いた、日の出の比喻はなんと美しいことでしょう。この夜明けは徐々に進んできましたが、最終的には、主の臨在の完全かつ鮮明な輝きが、あらゆる悪、無知、迷信、そして罪の闇を追い払うことになるでしょう。最終的には、主の臨在の結果として、「主の栄光の知識」が「海を覆う水のように」全地を満たすことは確かですが、主ご自身の弟子たちは、その臨在の光によって最初に照らされる者たちです。ハバクク書 2:14

終わりの時に信仰の家族に与えられる真理について、さらに別の例えを用いて、イエスはご自身が再臨された際、「時宜にかなった糧」をもって彼らに仕えたとおっしゃいました。（マタイによる福音書24:45-47；ルカによる福音書12:37）イエスと使徒たちの証言を総合すると、この時代の主の民は、聖書に記された真理についてさらなる理解という祝福を受けることを期待すべきであることが明らかになります。しかし、聖書には、神が預言者や使徒、そして主イエスの心を啓発された過去のように、この終わりの日の啓示が奇跡的な方法で与えられることを示唆する記述は一切ありません。神のすべての計画と目的は今や聖書に記録されているため、この種のさらなる啓示はもはや必要とされないのです。

私たちは、この世の終わりに、預言に示された方法によって、神の民に神の御言葉に対する特別な理解が与えられていると信じるに足る理由を持っています。私たちが明らかにしなければならないのは、この理解が、実際に神の計画であり、暗黒時代の長い数世紀の間にほとんど見失われていた啓示であるかどうかということです。それが神の御言葉の約束や預言と調和しているかどうかを検証しなければなりません。

神の計画

では、私たちは今この時点で、真理のメッセージを持っているのでしょうか。人間の贖いと救いに関する神の計画全体を理解するにあたっては、教義の1つや、あるいは数つの個別の点だけを検証しただけでは、真理と誤りを正しく見分けることは

できません。私たちがまず見極めなければならないのは、神の計画の中心的なテーマと、その計画のあらゆる細部が向かっている偉大な目的です。神の御言葉にある預言や約束を掘り下げていくと、何が明らかになるのでしょうか。それは、神が、この地上に王国を築き、墮落した人類が神の至高の御意志に反して起こした反逆を鎮め、人類がキリストを通して神が備えてくださったいのちを受け入れることによって、完全な状態に回復され、永遠に生きることができるようにすることを意図しておられるという事実です。

イエスは、私たちに「御国が来ますように。天におけるごとく、地においても御心が成りますように」と祈るよう教えられたとき、この偉大なテーマを要約されました。（マタイによる福音書**6:10**）イザヤ書は、この神の御旨の成就が、弱々しい肉体の力に依存するものではなく、「その（イエスの）肩に統治がのしかかる」ものであり、「万軍の主の熱意がこれを成し遂げる」ことを明らかにしています。イザヤ**9:6,7**

この偉大なテーマは、神の御言葉の至る所に浸透しています。それは単に、神の御計画とは、最終的に人間を祝福するために神がなされることの骨子であることを意味しています。教会は、何世紀にもわたり、聖書のこの根本的な真理から逸脱していました。神の御国が世界を治め、祝福することを祈り待ち望む代わりに、教会と国家を結びつけることによって、人為的な王国が徐々に築き上げられました。これは「キリスト教世界」と呼ばれ、その体制の力や影響力は現在でははるかに弱

まっていますが、その基盤となった根本原則は、今もなお、神の聖なる御言葉によって啓発されていない人々の思考や行動を支配し続けています。その原則とは、人間が神に代わって神の働きを行わなければ、その働きは全く成し遂げられない、というものであるようだ。その結果、多くの人々は現在、神が諸国民を祝福するための計画をお持ちであり、人間の助けの有無にかかわらずその計画を実行されるという事実を見失っている。

失望——そして理解

この時代の終わりに真理が大いなる啓示を受ける以前、19世紀前半のウィリアム・ミラーら預言の研究者たちは、時代のしるしや特定の預言によって、主の再臨が目前に迫っていることを発見していました。しかし、彼らはキリストの再臨のあり方を理解できていなかったため、期待が裏切られることとなった。彼らは、キリストが手と足に釘の跡を残した人間の姿で来られると想定していたのである。彼らは、キリストが世の命のためにご自身の肉体を捧げ、人間の目には見えない栄光に満ちた神聖な存在として死からよみがえられたという事実を見落としていた。したがって、キリストが再臨される際には、預言の成就を「見張り」、注視していた者たち以外には誰にも気づかれることなく、「泥棒のように」目に見えない形で現れることになっていたのです。ヨハネの黙示録 16:15 ; マタイによる福音書 24:42,43

それからそう遠くない1800年代後半、熱心な聖書研究者たちが、相当な期間をかけて預言を研究した。その研究によって明らかになった偉大な真理

の一つは、主の再臨の目的であった。聖書は、主が地球を滅ぼすためではなく、人類を命へと回復させるために再臨されること、そして預言における「世の終わり」とは、実際には現在の邪悪な社会秩序の終焉であり、「新しい天と新しい地、神の義に満ちた世界」という新しい秩序の確立であることを示していた。（ペテロの手紙第二 3:13）使徒言行録 3:20,21において、使徒ペテロは、キリストの再臨の期間中に、キリストを通して、またキリストによって成し遂げられる神の計画について語りました。彼はそれを「万物の回復の時」と表現し、さらに、これこそが「世の初めから、神の聖なる預言者たちの口を通して」神が証しされてきたことであると付け加えています。これこそが、**我**が聞き、預言者たちを通じてペテロと私たちに明らかにした、神の声——すなわちビジョン——であった。

今日のビジョン

神が定められた道によって今日私たちに伝えられ、私たちが喜び祝っている真理の啓示は、すべてを包括するものです。それは、神が古代に御自分の民に与えられたすべての偉大な啓示の意味を包含しています。ノアは、私たちが今日持っているような形でこの幻を理解していなかったかもしれないし、あの世の終わりに関する彼の経験が、私たちが今生きている「人の子の時代」——この「現在の邪悪な世」の終わりに近づいている時代——を予表していたことに気づいていなかったかもしれない。（マタイによる福音書24:37-39；ガラテヤ1:4）それでも、ノアにとって、来るべき大

洪水について知らされ、それに関連して奉仕する特権を与えられたことは、祝福されたことでした。

神が、アブラハムの子孫を通して地上のすべての氏族を祝福するというご計画を告げられたとき、アブラハムはどれほど喜んだことだろう！しかし、彼は、この祝福の「子孫」が、イエスと、イエスと共に生き、共に支配するために、イエスと共に苦しみ、死ぬイエスの体の肢体たちから成る「信仰の子孫」であることを知らなかった。ガラテヤ人への手紙 **3:16,27-29**

モーセは、燃える荆棘を見て、神の声を聞いたとき、畏敬の念に打たれました。神は、彼が立っている場所は聖なる地であるから、靴を脱ぐよう命じられたのです。彼は、自分が民をエジプトから救い出し、彼らの律法を与える者となることを知りました。しかし、全人類にもたらされるより大きな救い、そして新しい契約のもとでユダヤ人と異邦人の双方が神と和解することについては、彼にはほとんど啓示が与えられていなかった。モーセが、より偉大な方が来られると預言したのは事実であるが、旧約聖書の他の預言者たちと同様、彼がこの預言や他の預言が持つ意味を非常に明確に理解していたかどうかは疑わしい。申命記

18:15-19 ; 使徒言行録 **3:22-26** ; 使徒言行録 **7:37** ;
ヘブライ人への手紙 **12:18-24**

イザヤ書は「高く、高く上げられた」主を目撃し、その光景に触発されて、そのような高貴で聖なる方の御心に従うよう導かれたが、彼の神に関する幻は、私たちが今日見ているような神の御性質

の栄光を完全に明らかにするものではなかった。イザヤは、私たちが特権として理解しているように、神の属性——すなわち、知恵、正義、愛、そして力——の驚くべき深みと調和を、彼が幻の中で見た「セラフィム」にこれほどの確に表されていることを、理解していなかった。イザヤ書 6:1-8

イエスに天が開かれたとき、この世での御業の目的、すなわち、イエスが人類のために苦しみ、死ぬべきであるという旧約聖書の預言の意味が、イエスに明らかにされました。当時、弟子たちにそれらの事柄を完全に説明することはできませんでした。イエスが言われたように、弟子たちは「今はそれを耐えられない」状態だったからです。（ヨハネによる福音書16:12）その後、イエスがご自身の死の意味について聖書を解き明かしてくださったとき、弟子たちはこれらの事柄をより深く理解するにつれて、胸が熱くなった。ルカによる福音書24:32

その幻の意味が、教会の「召命」を含むものへと広がったのは、ペンテコステの時であった。（使徒言行録 2:36-39）そうして、キリストの足跡をたどる者たちは、主と共に苦しみ、死ぬという特権、すなわち、この時代の「より優れた犠牲」に与ることを、より深く知るようになった。（ヘブライ人への手紙 9:23）この尊い真理もまた、暗黒時代には見失われていたが、それは今日、私たちが恵まれている栄光に満ちた幻の一部である。

パウロが従わなかったことのないその幻は、そのあらゆる含意において栄光に満ちたものでした。その中で彼は、神の計画が異邦人を包含する段階

へと進み、彼らに、王国の約束においてユダヤ人と同じ相続人となる機会が与えられていることを見出したのです。（エペソ人への手紙 2:11-22）その後、パウロには他の幻も与えられた。彼は「第三の天」へと「引き上げられ」、また「パラダイス」——「義が住む新しい天と新しい地」——へと導かれ、当時はまだ時機が熟していなかったため、語ることを許されなかった事柄を目撃した。

（コリントの信徒への手紙二 12:1-4；ペトロの手紙二 3:13）今日、私たちも信仰の目によって「第三の天」を見ることができ、パウロが「パラダイス」で何を見たのかを知ることができます。彼は、将来の回復が成し遂げられ、全人類が、地上に平和と完全な命に満ちた世界的なエデンの園で暮らすという、神の御計画を見たのです。（イザヤ書 51:3；エゼキエル書 36:33-36）パウロは自分が見たことを公言することを許されませんでした。が、私たちはそのビジョンによって、まもなく確立されるキリストの王国の祝福された知らせを全世界に伝えるよう命じられているのです！ マタイによる福音書 24:14；テモテへの手紙第二 4:2

真理に対する責任

すでに述べたように、古代において神が御自分のしもべたちに幻を与えられたとき、それらは奉仕のための使命でした。神が私たちに与えてくださった「真理」の幻についても同様です。私たちにはそれに関してなすべきことがあります。それは私たちにとっても奉仕の使命であると同時に、私たちの奉仕が「聖く、神に喜ばれる」ものとなる

ために満たさなければならない条件や資格を含む使命でもあります。ローマ人への手紙 12:1

私たちは、自分の手が神の奉仕に用いられることを願っています。また、自分の足が「嘆くすべての人を慰める」（イザヤ書 61:2）ために、神の愛のメッセージを運ぶのに素早く動くことを願っています。（ ）私たちは、自分の唇と舌を用いて、神の愛を語り告げたいと願っています。実際、もし私たちがその幻の正しい精神を心に深く刻み込めば、自分の持つすべてのものを神の奉仕に用いたいと願うようになるでしょう。「主よ、私は何も隠しません」——私たちは、理解の目を開いて御栄光を見させてくださった御方に、そう申し上げるでしょう。私たちは喜んで、すべてを御方に捧げます。

これらすべては、天のビジョンへの完全な従順の中に含まれています。パウロは、私たちが「あらゆる思い」をキリストへの従順へと従わせるべきだと記しています（コリントの信徒への手紙二 10:5）。これに満たないものは、主を完全に喜ばせることはできません。キリストは、私たちの光を輝かせるべきだと述べられ、さらに、その光を神に受け入れられるものとするための、義に関する多くの条件を明らかにされました。（マタイによる福音書5:16、フィリピの信徒への手紙2:15）それでは、真理の力に自らを完全に委ね、そのビジョンへの従順の中で、そこから生じるあらゆる経験に喜びを見出しましょう。時間は限られています。まだ機会があるうちに、忠実であり続けましょう。